

|               |   |
|---------------|---|
| Title         | 英語の相補的反義語について   |
| Author(s)     | 上野, 義和  |
| Citation      | 大阪外国語大学学報. 64 p.349-p.356   |
| Issue Date    | 1984-03-20  |
| oaire:version | VoR   |
| URL           | <a href="https://hdl.handle.net/11094/80985">https://hdl.handle.net/11094/80985</a> |
| rights        |   |
| Note          |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 英語の相補的反義語について

上 野 義 和

## A Note on Some English Complementary Synonyms

Yoshikazu UENO

### § 1

二つの語のもつ意味が反対の関係にある時、それらの二語は「反義語（又は対義語，反意語） (=antonym)」とよばれる。反義語は同義語 (=synonym) の逆の概念をもつもので、同義語においては意味の重なりがみられる。同義性というものは存在しない、従って同義性を認めない、という考えが以前にはあった。このような場合にいつも主張されることは、あらゆる意味と機能とがいかなる場合においても全く同一であるような語彙項目の例はいかなる言語にも存在しない、ということであった<sup>1)</sup>。例えば、‘big’ と ‘large’ は物理的な大きさに言及する時、‘a big house’ と ‘a large house’ とでは交換可能であるが、‘a big man in the town (町の重要人物)’ と ‘a large man (大柄な人物)’ とでは意味がちがう。又「重要な」の意味の ‘big’ は ‘my big sister (私の姉)」の ‘big’ とも意味を異にする。こう考えると、確かに絶対的な同義性は存在しないだろう。かといって、同義性という概念が全くだめになってしまうわけではない。同義性というのは常に部分的なものと考えればよい。上例の最初の ‘big’ は、意味的に ‘large’ につながり、二番目の ‘big’ は ‘important’ に、最後の ‘big’ は ‘elder’ に、というふうに語彙と意味とが複雑にからみ合っている。従って、語彙と意味、同義性と多義性等の間に階層を設け、それらの関係を網の目 (network) で表記する必要がある、という主張も成り立つことになる<sup>2)</sup>。

同義語に対して、反義語には意味の重なりがないように思われがちだが、実際には反義語にも意味の重なりがある。ただ、意味の重なりのない部分が、同義語では単に異っているだけなのに対して反義語では反対や対立の関係にある、という違いがあるだけである<sup>3)</sup>。このように、反義の関係にある語群は、対立する意味をもつという点では共通してはいるが、その対立の仕方にはいくつかの種類がある。例えば

- (1) The man is neither rich nor poor.
- (2) \*The man is neither dead nor alive.

(1)が適格文で(2)が非文であることから, ‘rich-poor’ にはそのどちらにも属さない中間的な意味領域が存在するのに反し, ‘alive-dead’ はそのような中間的な領域を許さない対立概念であることになる. ‘alive-dead’ 型の反義語は, alive=not dead, not alive=dead のように, 一方の否定が他方の肯定と常に等しいところから, 「相補的反義語 (complementary antonym)」とよばれている<sup>4)</sup>. この型に属するものに, 他に ‘open-closed’ がある. それは, 次の文

(4) \*The door is neither open nor closed.

が非文であることで証明される. しかしながら,

(5) \*The man is more alive<sup>5)</sup> than the woman.

(6) \*The man is more dead than the woman.

(5), (6)の両文とも非文であるのに対して,

(7) The front door is more open than the back door.

(8) \*The front door is more closed than the back door.

(7)が適格文で(8)が非文であることから, ‘alive-dead’ には程度や段階の概念が含まれないが, ‘open-dead’ では ‘open’ にだけ程度や段階の概念が存在しうることが認められる. 以上のことから, 相補的反義語には二種類あることがわかる. 今, 仮りに一方をA型, 他方をB型と名付けると, 次のようにまとめられよう.

A型: 反義の関係にある対のいずれも比較や程度の段階を許さないもの

alive-dead, animate-inanimate, countable-uncountable, male-female, present-absent, single-married 等

B型: 反義の関係にある対の一方のみが比較や程度の段階を含むもの<sup>6)</sup>

open-closed, equal-unequal, visible-invisible 等

## § 2

前述した反義の対のうち, 非段階的な (non-gradable) 語はすべて, 程度や度合いを示す語と共起することはありえないはずだが, 現実にはしばしば共起する例が見うけられる. 例えば,

(9) The man is almost dead.

(10) The door is almost closed.

(11) The man is almost invisible.

のように, 程度に言及する ‘almost’ が非段階的語と結びつく. その一方, 前出の(6), (8)及び次の(12)

(12) \*The man is more invisible than the woman.

が非文であることから、これらの形容詞が非段階的であることも依然として事実である。この共起関係は、後に述べる ‘more perfect’ や ‘more unique’ などと違い、人によっては眉をひそめるような現象ではなく、ごく普通一般に容認された用法である。とすれば、‘almost’ は決してその直後の非段階的形容詞を修飾するものではないということになる。(9)を例にとると、実は(9)は次の文

(13) The man is dying.

と意味上等しい関係にあり、さらに(13)はうらを返せば

(14) The man is still alive.

とも意味論的にはつながりがある。故に、‘almost’ は統語的には ‘dead’ の直前に位置するが、意味論的には ‘dead’ と相補関係にある反義語 ‘alive’ に言及したものであると考えねばならない。(5)が非文であることは ‘alive’ には段階性や度合いが含まれていないことを意味する。生きているものはすべて等しく生きているわけである。しかし、「生」という概念を「線」としてとらえることはできる。その線上の両極端に「誕生」と「死」が位置する。誕生は出発点にあたり、死は到達点にあたると考える。生を線、死を点としてとらえることは、‘in life’, ‘at death’<sup>7)</sup> と言えるが ‘at life’, ‘in death’ と言えないことから裏づけられる。‘almost dead’ は、結局、「生という線上のほとんど終着点に近いところにいる状態」を述べた表現であるということになる。このことは、(9)の ‘almost’ を類義表現で言い換えて

(15) The man is all but dead.

とした時、‘all but (=everything except) dead’ が「死(という到達点)を除いた全部」という意をもつことから明らかにされよう。ただし、‘dead’ が ‘almost’ や ‘nearly’ のような、到達点にごく近い程度を示す語や、又完全に到達したことを示す ‘completely’ のような種類の語としか共起せず、又

(16) \*The man is a little alive.

(17) \*The man is comparatively alive.

のような文や(5)が非文であるのは、‘a little’ や ‘comparatively’ の示す度合いが、死という到達点から誕生という点にさかのぼっていった線上のどのあたりになるのかという基準が全くわからないということ、即ち ‘alive’ には、例えば、‘open’ などに見られるような明確な段階的概念が全くない、ということに帰着する。

(10), (11)も(9)と同様に扱われよう。ただ、前者の場合は、(7)及び次のように

(18) The star is more visible than the others around it.

(18)が適格文であることから、‘open’ と ‘visible’ は段階的概念を許す形容詞であるという点で ‘alive’ とは異質である。従って、(16)が非文であるのに対し、次の両文

(19) The door is a little open.

(20) That star is a little visible.

は許されるが、次のような場合、片方は非文になる。

(21) The door is half open.

(22) \*That star is half visible.

‘open’ には常に ‘completely open (完全に開ききった状態)’ と ‘closed’ という両極端との間にある段階や度合いの大小を的確に指摘できる 明白な 基準が伴っているわけで、同じB型に属する ‘open’ と ‘visible’ の間にも統語的、意味的に異なる性質が存在することがわかる。又一方、同じA型であっても、次のように

(23) \*The man is almost  $\left\{ \begin{array}{l} \text{single.} \\ \text{married.} \\ \text{present.} \\ \text{absent.} \end{array} \right.$

(24) \* $\left\{ \begin{array}{l} \text{Whales are} \\ \text{Water is} \end{array} \right\}$  almost  $\left\{ \begin{array}{l} \text{countable.} \\ \text{uncountable.} \end{array} \right.$

(25) \*The  $\left\{ \begin{array}{l} \text{boy} \\ \text{girl} \end{array} \right\}$  is almost  $\left\{ \begin{array}{l} \text{male.} \\ \text{female.} \end{array} \right.$

(26) \* $\left\{ \begin{array}{l} \text{Whales} \\ \text{Trees} \end{array} \right\}$  are almost  $\left\{ \begin{array}{l} \text{inanimate.} \\ \text{animate.} \end{array} \right.$

(23)～(26) がいずれも非文で、(9) が適格文であることから、‘alive-dead’ の対は、他のA型の相補反義語の対とはやや異質であることもわかる。以上のことからA型及びB型のさらに一層詳細な下位区分が必要であると考えられる。

### § 3

‘perfect-imperfect’ の対も又

(27) \*His answer is neither perfect nor imperfect.

が非文で、かつ ‘perfect’=‘not imperfect’, ‘not perfect’=‘imperfect’ が常に成り立つことから、相補的反義性をもつものであることになる。‘perfect’ は「不完全なところが全くない、完全な」の意味をもち、論理的には、例えば、‘complete’, ‘unique’, ‘utter’ などと同じく、それだけで一種の最上級に相当する語と見なされる<sup>8)</sup>。ということは ‘perfect’ には段階的概念が入りこむ余地がない。ということにつながるが、現実には

(28) His dance was more perfect than hers (was perfect).

のような文がしばしば現れる。いかに純粋主義者が反対を唱えようとも、上述の用法は普通一般に用いられているものである<sup>9)</sup> ことは否定できない。この現象を、論理の世界と現実の用法とのくい違い<sup>10)</sup>、として片づけてしまうことは安易にすぎはしないか。又、この用法を ‘illogical’ とよぶのは自由だが、はたして本当に非論理的なのだろうか。

まず、非論理的と考える根拠は、‘perfect’ を比較級にすることは非段階的な ‘perfect’ に段階性を認めねばならないことになるから、ということではないか。もしそうならば、それは確かに非論理的である。しかし、(28)における ‘hers was perfect’ の ‘perfect’ は、本来の ‘free from any imperfection’ ではない。むしろ、「彼の踊りの方がより完璧」というからには、「彼女の踊りは完璧さでは劣っている」と考えられる。完璧さが劣るということは、完璧さが足りないということと等価であり、それはつまり「不完全」を意味している。このように考えることがむしろ論理的なのではないか。(28)には次のような脈絡をつけ加えることができる。「彼女が踊った時、その踊りが完璧だと思えた。しかし、彼が踊った時、その踊りが彼女の踊りよりまさっていると思えた。」この時点で彼女の踊りはもはや完璧とは判断されなくなっている。‘perfect’ であるかないかの判定基準に「ゆれ」が生じている。その判定には話者の「主観」が関与しているのである。その逆の場合、即ち判定基準が「客観的」である場合、例えば 1 + 1 に対する答えのようにそれが唯一無二である時には、‘perfect’ は比較の対象を欠く故、比較級や最上級の形をとることはありえない。

再び(28)に戻る。‘perfect’ が ‘imperfect’ であることは前述した通りだが、実は ‘more perfect’ 自体も実質は ‘imperfect’ ではないか。まさに比較級という形そのものがそのことを証明している。ただ、比較級の場合は原級にくらべてその分だけ不完全さが少なく、従ってそれだけ「完全であること」に近いといえる。‘most perfect’ となって初めて「不完全さが殆どない」という意味を表わしうる<sup>11)</sup>。判断の基準が主観に左右されると、‘perfect’ は ‘imperfect’ の意味を帯びて活動し始める。反義の関係にある二語は常にお互いの存在を意識し、一方だけが表面に現れてもその背後にその片割れが分身として存在する。又、

(29) He is engaged in a *fuller* treatment of the problem.

(30) They *very fully* appreciate our problems<sup>12)</sup>.

(30)において、‘very’ は統語的には ‘fully’ を修飾してはいるが、‘fully’ は非段階的な語である故、その片割れの ‘not-fully’ の程度が ‘very’ によって示されている。ある ‘treatment’ や「諸問題を ‘appreciate’ する」行為そのものが抽象的であるため、それを ‘full’ かどうか判断するのに主観が入りこまざるをえなくなる。そうすると「not-full の程度がどれくらい full に近いか」を示すのに、形態上は非段階的な語と全く同じ語を使う状況が生じやすくなる<sup>13)</sup>。おそらくはこのことが

(31) I have never seen a more complete { ? *investigation*.  
  ? *\*fool*.

- (32) He has a very perfect  $\left\{ \begin{array}{l} ? \text{ understanding of the problem.} \\ ? *right \text{ to do what he likes.} \end{array} \right.$

この両文において、抽象的にかつ動詞から派生した名詞の方が、そうでない名詞よりも容認度が高くなる、という調査結果<sup>14)</sup>を裏づける理由となりうるだろう。

これまで述べてきたように、程度や比較を示す語と非段階的な語が共起する現象、非段階的な語が原級、比較級、最上級として使われる現象は意味論的には根拠のあることであって、‘absurdity<sup>15)</sup>’一言でかたづけられることではない。根拠こそ示してはいないが Jespersen<sup>16)</sup>は次のように言う。

...*more perfect and most perfect* really mean ‘nearer and nearest to perfection’.  
Similarly *fuller, fullest*...

O.E.D.<sup>17)</sup>も同様にこの‘perfect’を

...often used of a near approach to such a state (=free from any imperfection)<sup>18)</sup>,  
and hence capable of comparison.

と説く。このような解釈を‘charitable’だと称する学者<sup>19)</sup>もいるが、何度も述べるように非段階的な‘perfect’以外に、一種の意味変化を起こした別の‘perfect’ (即ち imperfect) が存在すると考えることは意味論的には不可解なことでは決してない。前者と後者は形態上は全く同一であっても、後者は、いわば、一種の虚偽的な語であるといえる。このような見方をすると、英語には二種類の‘perfect’が存在すると言うことができる<sup>20)</sup>。次のような比喩的表現も又、別種の意味変化が生じたものである<sup>21)</sup>。

- (33) This is the *deadest* town I was ever in<sup>22)</sup>.

## § 4

### 〈ま と め〉

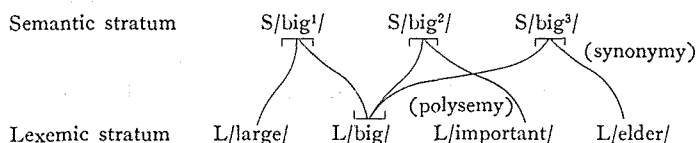
本来は、段階的概念をもたない語が比較級や最上級に形を変えたり、程度や度合いを示す語として共起する時、

- (1) 前者と反義の関係にある語には段階性が含まれ、意味論的には程度や度合いを示す語はその段階に言及している。
- (2) 前者と形態上全く同一の語がその反義語の代りに使われるが、両者は意味論的には別種のものである。

又、このような現象がしばしば生ずるのは、本来非段階的であるべき概念が話者の判定基準のゆれ(=主観)によって左右されてしまうからである。びんに水が一杯入っていてこれ以上一滴も入らない場合、‘full of water’ といえ一杯と判断する基準は客観的である故、上記のような現象が生じることは決してありえない、と考えられる。

注

- 1) 『現代言語学——紹介と展望——』 p. 48.
- 2) S. M. Lamb (1966), D. G. Lockwood (1972) で説かれている成層文法 (Stratificational Grammar) もその一例。その主張するところに従って、本文中の語彙と意味とを網の目で表わすと、およそ次のようになる。



- 3) 『新英語学辞典』 pp. 83~84, p. 1222.
- 4) 例えば, J. Lyons (1977), p. 271ff.
- 5) She had a most alive mind. (彼女はとても生き生きした心の持主だった) 小西 (1975, p. 48) の 'alive' や, That was the deadest party I ever attended. (Bryant, 1962, p. 59) の 'dead' は、本来の「生物の生き死に」の意から、それぞれ「生き生きした」「まるで死んだような」という比喩的意味に変質したものである故、ここでは除外する。
- 6) この定義は動詞にもあてはまる (e. g. 'behave-misbehave' R. Quirk et al. 1974, p. 450) が、本稿では形容詞及び副詞のみ扱うことにする。
- 7) 「一点」を示す前置詞 'at' としか共起しないことから、'death' は一点を指し示す概念であること、従ってその形容詞形は度合いの大小という段階性をもちえないこと、'almost' が意味論的に 'dead' に直接言及するものでないこと又、内部を示す前置詞 'in' と共起するが 'at' とは共起しないことから、'life' (従って 'alive') は「広がり」という概念をもつことが一層明らかになる。
- 8) O. Jespersen (1954), 11. 1s. H. W. Fowler (1970), p. 445.
- 9) P. G. Perrin (1965), p. 550.
- 10) H. W. Fowler (1970), p. 445.
- 11) 同様のことが例文(12)にもいえる。もし(12)が適格文だとするとその 'invisible' は実は 'visible' を意味することになる。
- 12) R. Quirk et al. (1974), p. 447.
- 13) 'more (most, rather, very) unique' も同じように説明できる。
- 14) R. Quirk et al. (1974), p. 448.
- 15) E. Partridge (1970), p. 192.
- 16) O. Jespersen (1954), 11. 4s.
- 17) Perfect a. 4.
- 18) 筆者による注。
- 19) M. Nicholson (1967), p. 417.
- 20) ただし、虚像的な 'perfect' は (complete, unique, utter 等も同様) 必ず比較級、最上級といった形をとるか、それとも 'very' などの程度を示す語と共起するかのいずれかでなければならない。即ち何らかの統語上の合図によって、それが虚偽的であることを示さなければならないということを筆者は述べたいのであって、'perfect' が「不完全」という意味をもつような語彙目録を作らねばならないと主張しているのでは勿論ない。
- 21) ただし、このような 'dead' は本来の意味が単に比喩的意味に変化した擬人法にすぎないのであって、'perfect' がその片割れの 'imperfect' を意味するような現象とは異なる。その原因は、勿論、'dead' の片割れの 'alive' が段階的概念を持ちえないことにある。
- 22) P. G. Perrin (1965), p. 550.



## 参考文献

- Bryant, M. M., *Current American Usage*. Funk & Wagnalls, New York, 1962.
- Fowler, H. W., *A Dictionary of Modern English Usage*. Oxford University Press, London, 1970.
- Hill, A. A., (ed.) *Linguistics* (Voice of America Forum Lectures, 1969)『現代言語学』宮部菊男監訳, 研究社. 1971.
- Jespersen, O., *A Modern English Grammar* Part VII. George Allen & Unwin Ltd., London, 1954.
- Konishi, T.,『英語前置詞活用辞典』大修館. 1975.
- Lamb, S. M., *Outline of Stratificational Grammar*. Georgetown University Press, Washington, D.C., 1966.
- Lockwood, D. G., *Introduction to Stratificational Grammar*. Harcourt Brace Jovanovich, Inc., New York, 1972.
- Lyons, J., *Semantics* 1. Cambridge University Press, London, 1977.
- Nicholson, M., *A Dictionary of American-English Usage*. Oxford University Press, 1957.
- Partridge, E., *Usage and Abusage*. Hamish Hamilton, London, 1970.
- Perrin, P. G., *Writer's Guide and Index to English*. Maruzen Co. Ltd., 1965.
- Quirk, R. et al., *A Grammar of Contemporary English*. Longman Group Ltd., London, 1972.
- × × × —————
- 『新英語学辞典』大塚高信, 中島文雄監修, 研究社, 1982.
- Oxford English Dictionary on Historical Principles*, ed. Murray, Bradley, Craigie, & Onions. Oxford 1888-1928.